SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ノースマン　導かれし復讐者

2022 年／アメリカ映画
配給：パルコ／137 分

2023（令和 5）年 1 月 28 日鑑賞　TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２３－１５

監督：ロバート・エガース
出演：アレクサンダー・スカルスガルド／ニコール・キッドマン／クレス・バング／アニャ・テイラー＝ジョイ／イーサン・ホーク／ウィレム・デフォー／ビョーク

みどころ

“ノースマン”って一体ナニ？また、“スカンジナビア神話”である“アムレート伝説”って一体ナニ？

父王を毒殺して王位に就き、母親を妃とした叔父に対する、甥からの復讐物語が『ハムレット』だが、その“原型”がここにあったとは！

“ヴァイキング”の勇猛ぶり（野蛮ぶり？）は有名だが、本作に見る暴力と殺戮のサマはすごい。「これぞ決闘！」と断言できるハイライトを含めて、“導かれし復讐者”＝アムレートの生きザマと死にザマを、しっかり考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ノースマンとは？ヴァイキングとは？■□■

『ノースマン　導かれし復讐者』という邦題を見ただけでは、「ノースマン」って一体ナニ？と思ってしまう。しかし、右手に剣を、左手に手斧を持った、上半身裸の屈強な大男、アムレート（アレクサンダー・スカルスガルド）の姿を見れば、本作がヴァイキング映画だということがわかる。

ヴァイキングとは、ウィキペディアによると、「ヴァイキング時代（Viking Age、８００年―１０５０年）と呼ばれる約２５０年間に西ヨーロッパ沿海部を侵略したスカンディナヴィア、バルト海沿岸地域の武装集団を指す」とされている。ヨーロッパの文明がギリシャ、ローマを中心に発達したのは、南ヨーロッパのそこは気候が温暖で農作物が豊か、さらに海に面していたから海の魚も豊かだったためだ。それに対して、スカンジナビア半島は寒いから、文明の発達が遅れたのは仕方ない。したがって、ヴァイキングが活躍した１０世紀頃のスカンジナビア半島やアイスランドは、なんとも野蛮な国！

ちなみに、そんな時代、主人公のアムレートたちが信仰していた宗教は？そんな目で、本作を検証してみるのも一興だ。

■□■三大悲劇の一つ『ハムレット』の原型がここに！■□■

シェイクスピアが１６０１年頃に書いたとされる、『ハムレット』は、「デンマークの王子ハムレットが、父王を毒殺して王位に就き母を妃とした叔父に復讐する物語」だが、それには本作が描く「アムレート伝説」という原型があったらしい。本作を監督したロバート・エガースは、共同脚本を書いたショーン、ロバート・エガースと共に、①スカンジナビア神話、②アイスランドの英雄譚、そして③アムレート伝説を融合した物語を、本作で完成させたわけだ。

しかして、本作は「導かれし復讐者」というサブタイトルのとおり、叔父のフィヨルニル（クレス・バング）に、父親のオーヴァンディル王（イーサン・ホーク）を殺されたうえ、母親のグートルン王妃（ニコール・キッドマン）まで奪われてしまった一人息子のアムレートが、フィヨルニルに復讐を果たすという物語だ。フィヨルニルはオーヴァンディル王の弟だから、なるほど、このストーリーは『ハムレット』そのものだ。

本作冒頭、凱旋して帰国したオーヴァンディル王を、国を挙げて歓迎するシークエンスが描かれるが、そこで忠誠を示していた国王の弟・フィヨルニルが、ある日突然、オーヴァンディル王を殺害。彼は１０歳の一人息子アムレートの殺害も命じたが、アムレートは何とかボートで島を脱出。その途中、彼は殺された父親の復讐と奪われた母親の救出を呪文のように唱え続けたが、１０歳の少年の力では、それはとてもとても・・・。

■□■復讐物語がスタート！同伴の美女は？■□■

２０２２年2月２４日のロシアによる侵攻から間もなく１年を迎えるウクライナは、広大な国土を持った穀倉地帯だが、１０世紀頃はキエフ大帝国と呼ばれていた。しかして、その当時のヴァイキングはそんな東ヨーロッパまで進出して略奪行為をしていたそうだから、今のロシア以上に野蛮だ。

父を殺された当時１０歳だったアムレートも、それから数年後の今は、東ヨーロッパ各地で略奪を繰り返す獰猛なヴァイキング戦士の一員となっていた。そしてある日、スラブ族の預言者（ビョーク）と出会い、フィヨルニルがアイスランドで農場を営んでいることを知った彼は、己の運命と使命を思い出し、奴隷に変装して奴隷船に乗り込んで、叔父の農場に潜り込むことに成功！そんな彼の側には旅の途中で親しくなった、奴隷女のオルガ（アニャ・テイラー＝ジョイ）がいたが、さてこれからの２人の運命は？

■□■暴力と殺戮のサマと美術班に注目！前作とは大違い！■□■

本作の監督は、『ウッチ』（１５年）（『シネマ４０』未掲載）と『ライトハウス』（１９年）（『シネマ４９』４２頁）のロバート・エガー。『ライトハウス』は、孤島の中での男２人の異様な人間関係を執拗に描いた面白い映画だったが、本作はそれとは大違いの、暴力と殺戮のオンパレードだから、その違いにビックリ！しかも、ヴァイキング時代の物語だけに、宗教や祈祷のシーンにおいても、スカンジナビア神話に基づく（？）さまざまな神話が登場するので、その異様さにもビックリ！そんな本作では、美術の担当者が重要だから、

その出来具合を含めてしっかり鑑賞したい。

■□■母親の救出はお門違い？男は単純だが、女は複雑！？■□■

私が本作を観ようと思ったのは、私の大好きな女優、ニコール・キッドマンが出演しているから。しかし、本作では、前半、中盤を通じて、国王の妻でアムレートの母親であるニコール・キッドマン演じるグートルン王妃は、ほんのちょっとしか登場しない。そればかりか、預言者役のビョークやアムレートと共にともにアイスランドに渡る奴隷女オルガの方が頻繁に登場するから、アレレ？ところが、やっとアムレートがフィヨルニルを探り当てて、復讐劇に着手し、フィヨルニルの館に住む、母親のグートルン王妃を救出しようとすると・・・？

そこから始まるグートルン王妃の告白は、なんとも意外なもの。なぜなら、それは、王の妻であったグートルン王妃は、王に愛想をつかし、自ら王の弟のフィヨルニルに乗り換えた、というものだったからだ。もちろん、観客にはオーヴァンディル王とフィヨルニルのどちらが国王にふさわしい人物だったのかはわからないが、両者をよく知っているグートルン王妃がそう判断したのなら、きっとそれが正しかったのだろう。すると、１０歳の時に父親が殺されるのを目の前にしながら、命からがら逃げ出し、叔父のフィヨルニルへの復讐と母親のグートルン王妃の救出を誓って、今日まで頑張ってきたアムレートの努力は、一体何だったの？本作後半には、そんな悩ましい人間ドラマ（？）も登場するので、そこでは、それまでのアムレートの生きザマについても、じっくり考えたい。

■□■これぞ決闘！巌流島は一瞬だったが、本作は？■□■

『ハムレット』の原型になった“アムレート伝説”を映画化した本作では、スカンジナビア神話をいかに映像（美）に反映させるかについて、“美術班”が重要であることは前述した。その重要性は、本作ラストのクライマックスになる、アムレートとフィヨルニルの決闘シーンで再浮上してくるので、それに注目！

リドリー・スコット監督の『最後の決闘裁判』（２１年）（『シネマ５０』１１７頁）は、妻の強姦を巡って、中世ヨーロッパで行われていた決闘裁判に注目した面白い映画だったが、その決闘ぶりは迫力満点だった。他方、日本で有名な、宮本武蔵と佐々木小次郎が対決した「巌流島の決闘」は、“そこに至る経過”や“その後の武蔵の生きザマ”は面白いものの、決闘自体は一瞬でケリがつく、あっけないものだった。

それらの決闘に比べても、本作ラストにみる、活火山の前の溶岩が吹き出る地帯でのアムレートとフィヨルニルの、何度も何度も重い剣と盾をぶつけ合って戦う決闘は見ごたえ十分！迫力満点だ！盾もボロボロ、剣もボロボロになりながら、最後に一方は胴に、他方は首に放った剣は？白土三平の「カムイ伝」や、さいとう・たかをの「ゴルゴ１３」等の“劇画”を彷彿させる、その決闘場面の結末はあなた自身の目でしっかりと！

こりゃ、迫力あり！こりゃ、面白い！もっとも、父王の復讐は？母親の救出は？そこらあたりの疑問点は残るが・・・。　　２０２３（令和５）年２月２日記